

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2005～2008

課題番号：17202001

研究課題名（和文） 西欧中世における言語哲学の展開と諸学における意義

研究課題名（英文） Development of the Philosophy of Logic and Language in Medieval Western Europe and its influence on various contemporary disciplines

研究代表者

清水 哲郎（SHIMIZU TETSURO）

東京大学・大学院人文社会系研究科・特任教授

研究者番号：70117711

研究成果の概要：西欧中世における言語哲学の展開と、その神学、存在論、情念論等についての意義について検討した。その結果、当時の論理学の言語理解から出発しつつ、神の超越性の理解によって越える思索のあり方や、12世紀の普遍論争は従来思われていたよりもさらにアベラルドゥスを中心としたものであったとの仮説、13世紀存在論・知識論を分析的的手法により理解することにより、言語論的側面に光があてられたことなど、多くの成果を得ることができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	8,300,000	2,490,000	10,790,000
2006年度	5,500,000	1,650,000	7,150,000
2007年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
2008年度	6,500,000	1,950,000	8,450,000
年度			
総計	25,100,000	7,530,000	32,630,000

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：言語哲学、中世論理学、中世哲学、哲学史、普遍論争、神学、存在論

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、これまで継続して行われてきた、中世言語哲学をめぐる次の諸研究を背景としている。

\* 科学研究費補助金 総合研究（A）

1994～1995 課題番号 06301001

研究課題「古代末期からルネサンスにいたる自由学芸の展開と中世哲学への影響」

\* 科学研究費補助金 基盤研究（A）（1）

1998～2000 課題番号 10301001

研究課題「西洋中世における言語哲学の起源と展開」

\* 科学研究費補助金 基盤研究（A）（1）

2001～2004 課題番号 13301001

研究課題「ギリシア哲学とキリスト教思想の交わる場におけるロゴスの哲学の展開」

これらを通して、自由学芸に含まれる弁証学を中心として古代哲学から伝わった言語哲学と、キリスト教の思想伝統にある「神のことば」をめぐる思索という二つの流れの交叉という場に、中世言語哲学のあり方を見たのであるが、これを受けてさらに中世言語哲学の展開を追い、またそれが当時の神学、心論、存在論といった諸領域においてどう影響をやっていったかを見ようということで、本研究課題を設定して、これまでの研究をさらに展開する方向付けをした。

また本研究グループは、これまでも国際的な研究の展開を志してきており、海外の諸研究者との交流と共同研究を進めることが、今後の日本の研究のあり方にとって重要であると考え、本研究を通してそれを引き続き発展させることを志向した。

## 2. 研究の目的

これまで数次に互って行ってきた、西欧中世における言語哲学の系譜の研究を更に展開し、11世紀から14世紀における西洋中世思想の動きに的を絞り、より高度の検討を試みる。すなわち、この時期に営まれた様々な知的活動において、言語についての理解ないし理論はどのような役割を果たしていたか、またそれら諸分野における言語理解と文法学・弁証学の言語理解ないし神学における言葉理解とはどのような関係にあったのか——後二者を反映しているだけなのか、あるいは逆に後二者に影響を与える面もあったのかといった点を、主だった哲学者について、および諸学派について明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は基本的に文献研究であり、校訂されたテキストの分析を基礎作業とするが、一部は写本を校訂しつつ分析する場合もある。また、分析に際して、文献学的・歴史的研究と分析的研究との調和の可能性を探りつつ、これを行う。テキストの解釈に加えて、内容の哲学的検討を行うこともあるが、そういう場合でも、文献学者・歴史学者のチェックを通過できるような堅実な方法をとる。

研究組織を次の3グループに分け、各グループ毎の共同検討を基礎に、時にグループ横断的な検討を併せおこなう。また、メンバーはいずれかのグループに所属するが、それを固定的にとらえず、自由な研究を旨とする。

[1. 11～12世紀における言語論の諸学における意義]：岩熊幸男、清水哲郎、山崎裕子、永嶋哲也。Mews C., Marenbon J., Burnett C., Rosier-Catach I. らと交流を重ねながら、アンセルムス～アベラールを中心として、この時期の弁証学に関する未調査の写本の読解をしながら、普遍問題の実質を探る。同時に、弁証学・文法学の、神学、倫理学等における言語論との関連も探る。

[2. 13～14世紀における言語論の諸学における意義]：川添信介、加藤雅人、加藤和哉、山内志朗、上枝美典、(清水)。パリ、オックスフォードにおける言語論の展開と、この頃の普遍論争の推移について検討することを基礎にする。ここでは、ビュリダン論理学の分析も行う。また、神学、存在論や情念論等

に視野を広げ、言語論の役割を探る。また、山内を中心に、イスラム思想が西欧に入ってきた経緯における言語論や普遍理解の影響について検討する。

[3. サポートグループ]：神崎繁、樋笠勝士、荻原理。他のグループの研究を、次の視点から支援する。・古代末期に至る諸学問分野におけるギリシア哲学の言語論を確認することを通して、それが西欧中世にどのように影響したかを検証するための材料を提供する。・また神崎によるキリシタン時代の日本へのアリストテレスの移入をめぐる検討は、西欧中世を近代の側からながめる視点を提供する。

## 4. 研究成果

[1. 11～12世紀における言語論の諸学における意義]

(1) *Ars Meliduna*の写本校訂の作業を岩熊が進めると平行して、その普遍論争における位置の分析を清水が行った。その結果、これがアベラルドゥスの言語と普遍についての理解を相手にして、その反対の極の主張をしているものであることが明らかになった。

(2) 岩熊がシャンポーのグィレムスとアベラルドゥスの周辺の写本の校訂と分析を通して、いわゆる普遍論争にあたるものはアベラルドゥス以前には見出されず、彼に先行する音声言語論派(vocales)など存在せず、これもまたアベラルドゥス学派のことではないかという主張を提示し、海外の主要な研究者の間で論議を呼んだ。清水も含め、必ずしも同意しない研究者が多いが、岩熊のテキスト分析とそれに基づく論に対する本格的な反論は、まだ出ていない。

(3) この他、山崎、清水は、アンセルムスとアベラルドゥスの神学・倫理学領域の思想の分析を行った。アンセルムスは論理学の知見から出発しつつも、論が進むにつれて、それを否定的に超える神の領域のあり方へと向かうが、アベラルドゥスは随所に論理学を背景にした思索があり、最後までそこに自らを定位し続けている。

[2. 13～14世紀における言語論の諸学における意義]

(1) トマス・アクィナスをめぐる研究においては、認識(川添)や、存在(加藤雅、上枝)についての思想の分析を行った。現代分析哲学的手法や、現代宗教哲学の手法や考え方にも眼を配るような研究方法をとった研究は、今後の発展の余地がある。至福といった倫理学領域の問題へのアプローチもした(加藤和)。(2) 13世紀以降の普遍論争について、山内はイスラム思想の影響も含め、その推移の見取り図を描く試みを行った。

(3) 普遍問題は、論理学の *suppositio* 論とも関係する。12世紀半ばのパリの学派の一つの流れがオックスフォードに受け継がれるのであるが、そこでは *significatio* が語が単独でもつ意味作用であるのに対して、*suppositio* は文脈の中に置かれた(文章の中で使われた)語が、文脈に応じて何かを指す作用である。これに対して、パリの伝統においては、語が単独でなす *suppositio* ということも認めており、普遍に関する実在論をとるか、唯名論をとるかということ以前の違いが両伝統にはある。これをバックにみると、ビュリダンの理論は、従来オッカム主義と看做されることもあったが、以上の区別から言えば、パリの伝統に属しており、確かに唯名論の側にはいるが、論理学のシステムは決してオッカム的ではない。例えば、発話される一回ごとの単語をタイプが同じでも別々の音声個体と看做すところなど、オッカムとは違う。このようにして、論理学システムの伝統の区別と、普遍についての立場の違いは、別々のこととしてみていく必要があることになる。

### [3.サポートグループ]

- (1) 古代哲学の側からの発言(神崎、荻原)、ストアとアウグスティヌスにまたがる言語論から美学的領域へのアプローチ(樋笠)を行い、ここから中世を通しての美についての研究への方向付けへと進んだり(これはこれからの研究にまつところが大きい)、中世以降の思想史への刺激となったりした。
- (2) 心について、古代から近代にいたる壮大な見取り図(神崎)は、中世言語論がどのように関わるかということについての問題提起ともなった。
- (3) また、「世界を語る」ということに表面化している言葉と物のかかわりを、古代から中世にかけて概観したが(清水)、これは本研究にいたる一連の研究成果のエッセンスを、平易にまとめる試みであり、古代哲学とキリスト教思想の絡み合いを縦系にした上で、世界を参照する仕方と、世界を参照することなく、言語・論理の世界内で考える仕方の絡み合いを横系にして、思想史を織りなすものとなった。

以上、全体として、中世言語論の推移について、相当の知見が得られ、またそれが諸学問領域においてどう働いたかについて個別の知見を得られたといえる。とはいえ、この種の研究は、グループをつくっていても、どうしても個人個人の研究の成果が要となる。それを公平にここに枚挙することはできず、全体の流れの説明になるところのみを以上では取り上げたので、より詳細な成果は次の発表論文等を参照されたい。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計37件)

- ① 清水 哲郎、死の訓練としての哲学—カシオドルス・イシドルス・アルクィヌス、東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要、22、1-8、2009、無
- ② 山内 志朗、中世の論理学、理想、683、136-145、2009、無
- ③ 上枝 美典、トマス・アクィナスにおける本質の構造—新たな普遍論に向けて—、理想、683、57-70、2009、無
- ④ 山内 志朗、ライブニッツにおけるアヴィセンナの声—共通本性の系譜、哲学の探究、36、41-55、2009、無
- ⑤ Hikasa, Katsushi、Augustine on the Aesthetics of Ambivalence、*Aesthetics*、13、23-32、2009、有
- ⑥ 樋笠 勝土、ストア派の哲学とプロティノス、新プラトン主義研究、9、1-4、2009、有
- ⑦ 樋笠 勝土、アウグスティヌスにおける「音楽」の概念—「魂論」としての『音楽論』—、パトリステイカ、13、44-84、2009、有
- ⑧ 神崎 繁、現実の耐えられない〈薄さ〉をめぐって—「洞窟の内なる影」、もしくは「自動機械の見る夢」再考—、哲学、60、51-66、2009、無
- ⑨ 神崎 繁、〈対話〉から〈規則〉へ—古典期からヘレニズム期への「理性」概念の変容をめぐって—、関西哲学会『アルケー』、17、18-30、2009、有
- ⑩ 山内 志朗、中世哲学と情念論の系譜、西洋中世研究、1、75-86、2009、無
- ⑪ 山内 志朗、イスラム哲学と西洋中世哲学との媒介としての普遍論争、哲学、59、45-60、2008、無
- ⑫ Iwakuma, Yukio、Pseudo-Rabanus super Porphyrium (P3)、*Archives d'histoire doctrinale et littéraire du moyen-âge*、75、43-196、2008、有
- ⑬ Ogihara, Satoshi、The Epicurean Attitude to Death、*International Colloquium of Ancient Philosophy and Greco-Roman Studies*、2008summer、47-58、2008、無
- ⑭ 永嶋 哲也、普遍実在論者の *status* と唯名論者の *status*—西欧初期中世の普遍論争における存在了解—、人間と文化(福岡歯科大学・福岡医療短期大学紀要)、35、9-26、2008、無
- ⑮ 川添 信介、ウェルブムと形象—トマス・アクィナスの認識理論との関連で、哲学研究(京都哲学会)、584、1-26、2007、

- 有
- ①⑥ 樋笠 勝士、プロティノスにおける Pankalia の思想—「舞台としての世界」概念の原風景—、上智大学文学部哲学科紀要、34、1-30、2008、無
  - ①⑦ 加藤 和哉、トマス・アキナスの至福論とアリストテレス、聖心女子大学論叢、109、3-32、2007、無
  - ①⑧ 清水 哲郎、中世普遍論争—何が争われたか、大航海、62、82-93、2007、無
  - ①⑨ 山内 志朗、ドゥンス・スコトゥスとイスラム哲学、大航海、62、94-103、2007、無
  - ②⑩ 樋笠 勝士、アウグスティヌスにおける両義性の美学—「アウグスティヌス美学」を構築する oxymoron 的語法の射程—、美学 (美学会)、221、1-13、2005、有
  - ②⑪ 山崎 裕子、カンタベリーのアンセルムスとカンブレのオドー、宗教研究 (日本宗教学会)、79(4)、1096-1097、2006、有
  - ②⑫ 加藤 雅人、存在様態と述語—トマス・アキナスと様態理論、哲学 (関西大学哲学会)、25、165-183、2005、有

[学会発表] (計 11 件)

- ① 山崎 裕子、スコラ哲学前夜におけるストア派倫理学—アンセルムスの *rectitudo* をめぐって—、第 58 回中世哲学会シンポジウム、2009 年 11 月 15 日、富山大学
- ② Shimizu, Tetsuro、Ockham as an Heir to Anselm, *Saint Anselm of Canturbury and His Legacy*, 2009 年 4 月 25 日、University of Kent at Canturbury, UK.
- ③ Yamazaki, Hiroko、Reconciler of the World: Anselm's Understanding of the Blessed Virgin Mary, *Saint Anselm of Canturbury and His Legacy*, 2009 年 4 月 25 日、University of Kent at Canturbury, UK.
- ④ 岩熊 幸男、*Vocales* 再論、第 56 回中世哲学会大会、2007 年 11 月 11 日、広島大学
- ⑤ Ogihara, Satoshi、Tha Contrast between Soul and Body in the Analysis of Pleasure in the *Philebus*、*International Plato Society*, 2007 年 7 月 24 日、ダブリン (アイルランド)

[図書] (計 23 件)

- ① Shimizu, Tetsuro & Burnett, Charles (eds.), Brepols, *The Word in Medieval Logic, Theology and Psychology*, 2009、440  
(Shimizu, Tetsuro、Introduction、1-13;  
Iwakuma, Yukio、*Vocales Revisited*、81-171;

Ueeda, Yoshinori、Thomas Aquinas: Being and Actuality、245-259;

Kawazoe, Shinsuke、Verbum and Epistemic Justification in Thomas Aquinas、273-289)

- ② 川添 信介、知泉書館、トマス。アキナスの心身問題—『対異教徒大全』第 2 巻から、2009、VII+415
- ③ 山内 志朗、岩波書店、岩波講座哲学 12 哲学史の哲学、執筆部分：イスラム哲学からの視座、2009、231-254
- ④ 川添 信介、岩波書店、岩波講座哲学 13 宗教／超越の哲学、執筆部分：理性と信仰—スコラ再考—、2008、129-147
- ⑤ 中川 純男 (編)、中央公論新社、哲学の歴史 3、2008  
(永嶋 哲也、VI 12 世紀の哲学、289-342;  
川添信介、VIII スコラ哲学とアリストテレス、405-427;  
加藤 和也、IX トマス・アキナス、498-531;  
山内 志朗、XI ラテン・アヴェロエス主義、561-581)
- ⑥ 清水 哲郎、岩波書店、世界を語るということ—「言葉と物」の系譜学、2008、162
- ⑦ 神崎 繁、岩波書店、魂 (アニマ) への態度—古代から現代まで、2008、224
- ⑧ 山内 志朗、平凡社、普遍論争—近代の源流としての、2008、480
- ⑨ 伊藤 博明 (編)、中央公論新社、哲学の歴史 4、2007 (清水哲郎、X ルター、393-428)
- ⑩ 上枝 美典、世界思想社、「神」という謎 [第二版]—宗教哲学入門、2007、294
- ⑪ Gasper & Kohlenberger (eds.), Pontifical Institute, *Anselm and Abelard: Investigations and Juxtapositions*、2006、(Yamazaki, Hiroko、Anselm and Aberlard on Original Sin、172-179;  
Shimizu, Tetsuro、Word and Esse in Anselm and Abelard、179-195)
- ⑫ SIEPM, Brepols, *Intellect and Imagination in Medieval Philosophy*、2006、(Shimizu, Tetsuro、The Place of *Intellectus* in the Theory of Signification by Abelard and *Ars Meliduna*、927-939)
- ⑬ 中川純男、加藤雅人 (編著)、世界思想社、中世哲学を学ぶ人のために、2005、282

[その他]

ホームページ

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/dls/medieval/kaken.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

清水 哲郎 (SHIMIZU TETSURO)  
東京大学・大学院人文社会系研究科・特任教授

研究者番号：70117711

### (2) 研究分担者

荻原 理 (OGIHARA SATOSHI)  
東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：00344630

樋笠 勝士 (HIKASA KATSUSHI)

上智大学・文学部・教授

研究者番号：10208738

岩熊 幸男 (IWAKUMA YUKIO)

福井県立大学・学術教養センター・教授

研究者番号：10135600

(2006 は研究協力者)

山崎 裕子 (YAMAZAKI HIROKO)

文教大学・国際学部・教授

研究者番号：50230404

(2007 は研究協力者)

永嶋 哲也 (NAGASHIMA TETSUYA)

福岡歯科大学・歯学部・准教授

研究者番号：60304698

(2007 までは研究協力者)

川添 信介 (KAWAZOE SHINSUKE)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90177692

山内 志朗 (YAMAUCHI SHIRO)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：30210321

上枝 美典 (UEEDA YOSHINORI)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：90221796

(2007 から参加)

神崎 繁 (KANZAKI SHIGERU)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：20153025

(2005 は研究協力者)

加藤 和哉 (KATO KAZUYA)

聖心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：00243618

(2008 は研究協力者)

加藤 雅人 (KATO MASATO)

関西大学・総合情報学部・教授

研究者番号：90185869

(2006 まで分担)

### (3) 連携研究者

#### (4) 研究協力者

Charles Burnett, Professor, Warburg  
Institute, London.

Irene Rosier, Research Director, CNRS,  
Paris.